

SCJ 56

ネパール

パンパとお兄ちゃんとお母さん

子どもの力。支える大人

スタッフからの便り





2010年の今年、パンパは小学1年生、ラクスマンは小学3年生。親子3人、笑顔を見せてくれた

そして今、お母さんの意識が少し変わった。

「毎日、子どもを飢えさせないことが、私のつとめ。
将来の夢をえがく余裕は、まだありません。
今はとにかく、毎日、学校に通わせてあげること。
私が子どもたちにしてあげられる、
せいっぱいのことです」

2010年7月19日 ネパール/ラプティ県ダン郡

パンパと、お兄ちゃんとお母さん。
2年前、武力紛争の混乱をさけて、
いま住む村へ移り住んだ3人。

お母さんは一家を支えるために、
石材を切り出して売りあるき、
パンパたちは、あてもなく、
ちかくの河原で遊ぶ日々が続いていた。

1年前のある日。家に
村の子どもや大人たちがやって来た。
奨学金の制度があるから、
パンパたちを学校に通わせてほしいと、
説得されたお母さん。



パンパ(5歳)と家の前に広がる景色



パンパのお兄さん、ラクスマン、11歳



パンパたちのお母さん



16. 小学校が遠かったり、編入の準備が必要な子どもたちには、分校を運営したり、識字教室を開いています。



13. 壁に並んだ素敵な教材。すべて教員たちの手作りです。



10. 教員育成も計画の一つ。生徒を差別しない、体罰を行わない教員を育てることは、紛争や、カースト、民族の問題を抱えるネパールでは必要不可欠です。



7. 早婚や、差別、児童労働、家庭内暴力といった社会問題を、路上劇をとおして大人や同年代の子どもたちに訴えたりもします。



4. パンパのように奨学金だけでは十分でない子どもには、SCJから制服や学用品など奨学品を配給します。



1. パンパたち親子が暮らす、ネパール西部のダン郡、そしてスルケット郡が私たちSCJの活動地。



17. ネパール語でなくタルー語を母語とする先住民族のための教材。タルー語の教員研修をし、教材を配布した結果、子どもの学習到達度もアップ。



14. 小学1年生を受け持つブシュラート先生。「子どもを中心にした授業を行うようになって、子どもたちが活発に授業を楽しむようになりました」



11. 「差別をしない」「体罰をしない」ことは、教員、保護者、子どもたちの約束事として学校の壁にも掲げられています。



8. 「子どもクラブ」では、一人ひとりが子どもの権利を知っています。「ぼくたちは自由なんだって。自分の意思で勉強をしたり遊んだり出来るって知っているよ」



5. 入学キャンペーンに毎年参加する「子どもクラブ」のメンバーたち。学年や民族を問わず集まって、社会的な活動を自主的に行います。



2. 兄妹が学校に通うきっかけとなった入学キャンペーンの様子。子どもも大人もNGOも、みんなで村中をまわって学校に通っていない子どもを探し出します。



18. 小学校にすぐになじめるように幼児教育にも力を入れています。優しい先生、たくさんの遊具。楽しそうな雰囲気、伝わってきませんか？



15. 私たちの教育支援は他にもあります。子どもの視線を考えた壁一面の黒板と真新しいカーペット。学習環境を整えます。



12. 「どうやったら子どもが授業に興味をもってくれるだろう？」子どもたちが学校に通いたいと思うように工夫することも、教員の役割。



9. こんな活発な子どもたちを支える学校運営委員会の大人たち。鈴村駐在員(中央)も加わって、学校をより良い場にする計画を立てます。



6. 「子どもクラブ」は、子どもたちが自分の感情や意思を表現できる場。



3. 「お金がないから学校にはやれないわ」と話す母親に、国の奨学金が受けられることを説明。

— 今後は、ネパール西部平野での支援現場の様子をお伝えします —
すべての子どもが学校に通えるように、みんなが出来ること



私たちがネパールで展開している教育支援では、教員や保護者だけでなく、子どもを取り巻く地域全体が一つになって教育環境を改善できるような働きかけを行っています。もちろんそこには子どもへの参加も含んでいます。特に私たちが力を入れているのが、前ページでもご紹介した子どもクラブの課外活動です。男女差別や児童労働、紛争や暴力といった、自分たちを取り巻く問題を、子どもたち自らが、演劇や歌、踊りで表現し、周りの大人や同年代の子どもたちに伝え、問題の解決に取り組んでいます。

先日、私が子どもクラブを訪れると、子どもたちは目を輝かせながら、「こっちの話も聞いて!」と、さまざまな話を聞かせてくれました。実際、幼い女の子が結婚させられそうになっているところを、みんなで親を説得して止めたこと、近所の子どもの出稼ぎを防ぐことが出来たことなど、次から次に話が出てきました。そして、自分たちのことにとどまらず、「日本の子どもたちはどんな問題に直面しているの?」「どんな活動をして

いるの?」と興味津々です。実はこの子どもクラブ、最初からこのように活発だったわけではなく、恥ずかしながら無口な子どもばかりでした。でも、柔らかい感性をもつ子どもたちは驚くほど意識を高め、みるみるうちに活発になっていったのです。

後日、この子どもクラブが企画した討論会に招待されました。政府関係者を含む大人を前に、子どもが主賓としてスピーチをする姿を目にしました。子どもには教育を受ける権利があること、そしてその権利を守るために、大人たちにもその義務を果たしてもらう必要があることなどを自分の言葉で語っているのです。

ネパールは1996年から約10年にわたり武力紛争が繰り返られ、2006年の和平合意から4年経った今でも、抗議行動や政党間の対立・権力争いなど、政情不安が続いています。国が実質的に機能していない中、ネパールの子どもたちは自らの力で着実に自分の周りの環境を変え、平和な国を再建しているのです。

みんなの声

自治体の取り組みに、
子どもの意見を
反映させたい

わこう子育てネットワーク理事 野宗玲子

私は現在、SCJが運営する埼玉県和光市の「わこう子どもプラザ」子ども版地域協議会※に協力しており、子どもの声を聴いて、それを大人が受けとめることの楽しさと難しさを実感しています。子ども版地域協議会は、子どものための自治体の取り組みについて、子ども自身が、より良くしていきたいと思うことについてのアイデアを出せる「場」です。私たち大人は、その「場」を支えるために、子どもたちの持つ力を信じ、子どもたちが意見を出しやすいように寄り添います。

正直、「子どもと向き合うのは覚悟が要るなあ」とプレッシャーを感じることもあります。子どもたちと一緒に喜んだり、悩んだり、笑ったり、時にあせったりしながら、子どもと同じ目線にいるうちに、少しずつ子どもの心に近づいていっているような気がします。これからも、もっとたくさん大人を巻き込んで、子ども参加を進めていきたいです。

私がSCJの
サポートをはじめた理由
「偶然と幸運」

SCJサポーター 上田誠

スタッフのみなさん、子どもたちへの支援をありがとうございます。幸運にも私は日本という豊かな国に生まれました。そして私は普通のサラリーマンとしてある程度の収入があり、寝食にも特に困ることなく毎日を楽しく過ごしています。しかし、私が内戦の激しい国などに生まれていたら、今のような生活を営む能力が自分にあったでしょうか?

答えは「ノー」でしょう。つまり今の恵まれた環境は自分の能力によるものではなく、たまたま日本人に生まれた偶然と幸運のおかげだと考えるようになり、SCJのサポートを始めました。他の人たちもそのことに気付いて、SCJへの寄付がもっと幅広く広まることを願ってやみません。

* * *

上記、野宗様の※について
SCJは現在、行政の子ども施策や事業に、子どもの意見を反映する子ども参加の仕組み作りを、埼玉県和光市と協働で実践しています。

あたたかいご支援、ありがとうございます。

今回ご紹介したネパールの「武力紛争の影響下にある子どものための教育事業」について、2010年度の支援実績の途中報告(2010年2月～6月)をお伝えします。

- 【支援地】ネパール西部 ダン郡・スルケット郡
- 【支援の対象者】のべ6,900人(子ども、大人を含む)
- 【活動金額】約200万円
- 【支援の途中成果】2008年比較で、支援地域で学校に通う子どもの割合が84%から98.3%へ、進級率が74%から83%まで上がりました。
- 【主な支援活動】研修の実施:子どもクラブのメンバー311人を対象に課外クラスを実施。識字教員6人を育成。80人の学校関係者に対し学校運営に関するワークショップの実施。52人の教員に対し子ども中心・子どもに優しい教授法研修を実施。13人の教員に先住民族の母語による授業研修の実施など。教材の配布:21種類の書籍を含む図書コーナーを20校に設置。遊具を25校に配布。タルー語の教材を10校に配布。校舎建設・修築:分校簡易校舎1校建設。カーペット・クッション・黒板を4校に配布。
※日本NGO連携無償資金協力(外務省)の助成を受けています。



●ネパール連邦民主共和国
国内の武力紛争を経て2008年に王政が廃止。国家再建の途上にあります。子どもは約1300万人。総人口の半数弱を占めます。平均年齢は21歳。小学校への純就学率は76%。出生1000人あたり51人が5歳の誕生日を迎えずに亡くなっています。(出典: The State of World's Children 2010ほか)

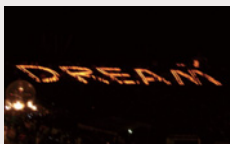
●ネパールでのセーブ・ザ・チルドレンの活動
SCJのネパールでの支援活動は、1992年、最も貧しい地域の一つ、東部ダヌシャ郡から始まりました。子どもや女性のための識字教育、栄養改善、出生登録事業などを展開した後、2004年に支援を「教育」分野に一本化。「全ての子どもを学校へ」を合言葉に小学校教育のアクセシビリティの向上を目指しています。2006年からは西部平野において武力紛争の影響を受けた子どもたちへの教育支援を実施しています。

* 最近の出来事 & お伝えしたいこと



「SCJ LIVE 2010～駐在員帰国報告会」を開催しました

8月5日、世界銀行東京事務所(東京都千代田区)にて、「SCJ LIVE 2010～駐在員帰国報告会」を開催しました。アフガニスタンにおける活動概要の説明に加え、SCJが日本人を派遣する全6ヶ国の駐在員を交えた座談会を行い、日ごろからSCJの活動をご支援いただいている方々を中心に、定員を大きく上回る51名ものご参加をいただきました。
※本報告会の会場は、世界銀行東京事務所より無償でご提供いただきました。



ap bankとのコラボレーションで、日本の子どもの貧困問題について発信

“Speaking Out Against Poverty (SOAP)”の一環として、日本の子どもの貧困問題をより多くの方々に伝えるために、ap bank fes'10にてキャンドルメッセージを実施。当日は約350名の子どもや大人がキャンドルカップに“夢”や“日本の子どもたちへの思い”を書き込みながら参加し、最後に“DREAM”の文字を描きました。今後も啓発イベントを実施しますので、ぜひご参加ください! → <http://www.savechildren.or.jp/ers/soap>



アフガニスタンで1億4千万円規模の教育復興支援事業を開始しました

ジャパン・プラットフォーム(JPF)より、約1億4千万円の助成を受け、アフガニスタンパルミヤン州で、学習環境の改善に向けた教育復興支援事業を8月10日より開始しました。学校校舎の増設といったハード面はもちろん、教員研修や就学前教育、保健教育といったソフト面を含む包括的な事業を実施し、紛争と貧困の影響下にある子どもたちが、教育を通して未来への希望を持続けることができるよう、活動を進めています。



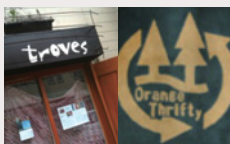
株式会社日新堂より、「ファンレーザー」の腕時計が発売されます

東京・銀座の老舗として時計販売を手がける株式会社日新堂には、SCのオリジナル・キャラクター「ファンレーザー」をデザインに配した時計の企画・販売を通してご支援をいただいています。今年9月より、これまでの目覚まし時計に続き、腕時計が新発売となります。おさまとペアで、あるいはご贈答品に、ぜひご利用下さい。
店舗一覧はこちら: <http://www.nsdo.co.jp/shop>



株式会社ノーウェアより、ハイチ地震の緊急支援にご寄付をいただきました

A BATHING APE®を運営する株式会社ノーウェアより、1月に発生したハイチ大地震の緊急支援に対し、チャリティTシャツ「HAITI」1,063枚を販売した収益の全額3,895,191円をご寄付いただきました。ハイチの復興および子どもたちの支援活動に活用させていただきます。→ <http://www.bape.com/>



鎌倉、神戸のチャリティショップから、ご支援をいただいています

2010年7月より、関東ではトローヴス(鎌倉)、関西ではオレンジスリフティ(神戸)と、2軒のチャリティショップからご支援をいただくこととなりました。使用可能な洋服や食器等を各チャリティショップにご提供いただき、リサイクル販売されることで、その収益がSCJに寄付される仕組みです。

< 編集後記 >

昨年、支援地の視察でネパールの子どもたち数人と出会いました。彼ら彼女たちも今回ご紹介した「子どもクラブ」のメンバーでした。ネパールの「子どもクラブ」は、とにかくすごい。子どもたちは、本当に大切なことを大切だと周りに伝えることのできる純粋さと、素朴さと、強さを持っています。それはきっと、国内の混乱を経験して、平和や教育の大切さを、身をもって実感しているからだと思います。出会い以来、私はネパールの「子どもクラブ」の大ファンです。(岡田茜)

【この冊子について】皆さまのご支援が子どもたちのためにどのように活かされ、何をもたらしたかをお伝えしたい。そして、子どもたちだけでなく、スタッフやSCJに関わるすべての人々のことを皆さまの近くに感じて欲しい——。この冊子は、私たちのそんな願いを形にしたものです。